ザ・パスポート

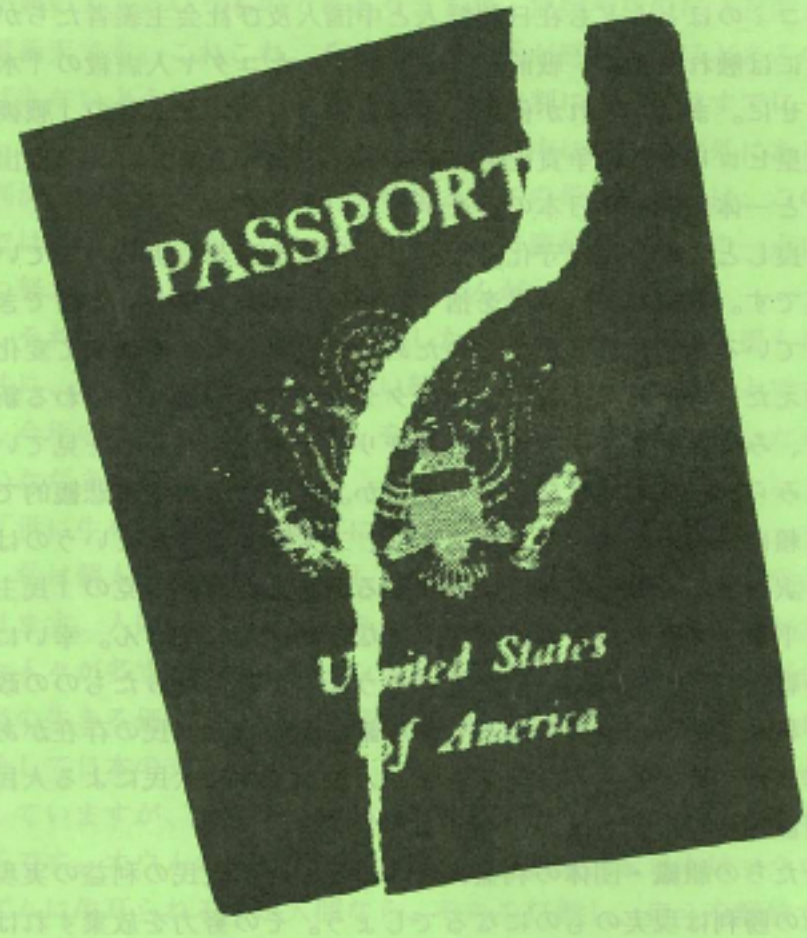
帰国者の裁判を考える会
東京都港区新橋2・8・16新橋石田ビル4階 救援連絡センター気付 電話03(3591)1301
郵便振替 00120-2-398834「帰国者の裁判を考える会」 定価200円 年12回分 3000円

丸岡さん第2回公判

10月17日（火）午後1時15分～
東京高裁 724

浴田さん第1回公判

11月28日（火）午後1時30分～
東京地裁



1995年10月9日発行

51

★９．８丸岡控訴審勝利集会へのあいさつ

９５．９．１　丸岡　修

９．８集会に、忙しい中をお越しいただいた皆さん、
まず、お礼を申し上げます。ありがとうございます。

このメッセージは９月１日に書いています。関東大震災７２周年の日ですが、この日本では「防災の日」となっています。「国民」の非常動員訓練がなされてる訳ですが、中央政府も地方自治体も、マスコミのほとんども在日朝鮮人と中国人及び社会主義者たちが１万人近くも虐殺された事実には触れません。戦前ドイツで起こったユダヤ人虐殺の「水晶の夜」については触れるくせに。まぁ、これが侵略と謝罪を明言しない衆議院の「戦後５０年決議」の無責任さ、天皇ヒロヒトの戦争責任を否定し戦後補償を否定した社会党出身首相の「首相談話」の軽さと一体になった日本の姿を示しています。

しかし、このような状況を良しとせず、総保守化に抵抗し、日本を変革しようとしている人々が多くいることも事実です。残念ながら小異を捨て大同で団結して闘うことができず、バラバラの闘いに甘んじている面があります。そのために、既成政治にあきれて変化を求めている人々が急激に増えた日本人民に対して、オルタナティヴな（とって替わる新しい）日本の姿を提示しえず、みすみす新保守主義者や保守リベラルに流れるのを見ているだけ、というのが参院選にみられた状況ではないでしょうか。それでも状況は悲観的ではありません。人々は今、信頼に足る政治勢力を求めており、二大保守政党化というのは要するに保守が分裂している訳です。この二大保守に対抗するのは、転向社会党の「民主リベラル」派などではなく、平和・護憲・民主の左翼勢力でなければなりません。幸いにして、議会選では共産党が善戦しており、今回の参院選ではうまくいかなかったものの政党「平和・市民」のように平和民主勢力の結集を試みている諸政治勢力と市民の存在があります。人民の側に立つすべての人士、勢力が結集すれば、人民が主体の人民による人民のための政権を獲得できる可能性は非常に大きいと言えるでしょう。

私たちの個々が自身や自分たちの組織・団体の利益にとらわれずに、人民の利益の実現に努力するならば、人民革命の勝利は現実のものになるでしょう。その努力を放棄すれば、小沢一郎や橋本龍太郎のような強権志向の政治勢力に日本の政治は牛耳られ、日本のファッショ化が確実になってしまいます。

最後に、日本赤軍９５・５・３０声明より。

「力を合わせない理由は山ほどあるでしょう。しかし、平和の実現と民主の実現という大きな目的のために、力をまず併せ、戦争に導き独裁をしようとするものと闘おうではあり

ませんか。そして力を合わせられなかった一つ一つの理由を明らかにし克服していこうではありませんか。目的が同じなら、ともに実践する中にしか克服の力は生まれてきません」

あれっ、丸岡控訴審との関係は？ははははっ、以上が前書きです。

私の控訴審の勝利の可能性は、日本の司法の反動的現状では、正直言ってゼロです。私の弁護団は、幸いにし優秀な精鋭弁護団ですが、それでも無理でしょう。ちょっと弁護団にゴマをすりすぎたかな（笑）。そんなことはありません。高裁判事たちが「重大な公安事件」と打ち合わせで明言している以上、「この事件では無罪にはしないぞ。だけども社会的関心は高いので、いきなり控訴棄却とはせずに審理は慎重にします」と言われているのに等しいものです。仮にハイジャック闘争に参加していたとしても、私にとっては「何が悪い！」というものではありますが、無関与なのに「有罪」とされることに対しては怒髪衝天です。これこれ、そこで「髪の毛が怒り立つほどあるのか」という古いギャグをとばさないように（笑）。こんな茶番の裁判には、私はすでに一喜一憂する線を越えてしまっています。私個人の行く末が、生涯獄中にあるか獄外にあるかは些細なことです。１審判決の前にも述べましたが、私にとっての最大の関心は、この裁判に勝つか否かにあるのではなく、どのようにしたら日本革命に勝利できるかの一点にあります。無論、裁判に勝つ努力を放棄するものではありませんが。

それが故に、皆さんにお願いしたいのは、私の公判支援もさることながら、それ以上に、共に、日本の変革に向けて闘い続けましょう、ということです。

今年の正月、「考える会」をお手伝いしていただいていたＳさんから坂本龍馬の言葉をいただきました。

「世に生を得るは事を為すにあり」

私は個人英雄主義を否定しますが、龍馬の言葉は人間の生きる価値を示したものではあります。人間闘ってこそ生きる価値、生きている事の価値があります。その価値を見失った人々が多すぎます。ファシスト宗教団体オウム真理教に集まるような者が出るのも、本当の生きる価値を自己の安定（「解脱」といつわろうが）にしか求めていないからです。そして日本の支配層とマスコミは、オウムを特異な宗教団体と描くことで事を済まそうとしていますが、オウムこそが、この腐敗した末期的資本主義の日本社会が生み出した申し子です。オウムがミニ・ファッショなら警察国家日本はマクロ・ファッショです。ファシズムに牛耳られるのが人間なら、それを打倒し、自らを解放するのも人間です。人々の変革する意志と力を信じ、人々がその力を発揮できるように共に頑張りましょう。人民が本当の社会の主人公になるように。

浴田逮捕を受けて、外務省はヨーロッパ・中東の公安情報活動の要として、前警察庁長官・城内康光をギリシャ大使に任命しました。また、中東への足がかりの第１歩として、自衛隊をゴラン高原に派兵しようとしています。ついでにレバノンに居ると思われている

日本赤軍叩きでもしますか？ムダなことはおやめなさい。

難局を勝利の土台に！人民の自治と共生をかちとろう！

9．8集会に関連して、2、3の補足

95．9．5
丸岡　修

1．映画：『赤軍－ＰＦＬＰ世界戦争宣言』に関して

私が改めて書くまでもなく、監督・若松孝二氏、助監督・足立正生同志、ナレーション・戸浦六宏氏（だったと思う）らによるドキュメント・フィルムです。制作・１９７１年夏。日本国内ではアートシアター系映画館で上映されることになっていましたが、公安警察の圧力によって上映禁止になり、秋から全国上映隊がバスで回る自主上映になりました。

撮影場所は、シリアのゴラン高原とヨルダンのヨルダン川東岸にあるジェラシ山です。１９７０年9月にヨルダン軍はヨルダン国内にあるパレスチナ人キャンプを攻撃し、ヨルダン内戦になりました。後に言う「ブラック・セプテンバー（黒い9月）」です。直前にＰＦＬＰが欧米帝国主義諸国の旅客機数機を同時にハイジャックし、ヨルダン国内の「革命飛行場」に強硬着陸させて機体のみを爆破した闘争がありました（映画冒頭のシーン）。イスラエルの侵略を恐れたヨルダン国王フセインは、パレスチナ解放勢力の一掃を計り、弾圧を始めたのです。当時のシリア政府はパレスチナ勢力防衛に回り、ヨルダンとは臨戦状態になりました。エジプトのナセル大統領が仲裁に入り、ヨルダンによるパレスチナ解放勢力に対する弾圧をやめさせました。ナセル大統領は過労のため急死します。アラブでは米国ＣＩＡによる暗殺説があります。エジプトではこの後、親米派のサダトがエジプト大統領になりました（ナセル後継者を排除して）。ヨルダンに話を戻すと、この内戦の後、パレスチナの武装勢力はパレスチナ被占領地（イスラエル）やシリア国境沿に追われました。その一つがジエラシ山でした。このジェラシでのパレスチナ・コマンドの日常を撮影したのがこの映画です。

イスラエル軍との戦闘場面がないのは、民間撮影班にはあまりにも危険なので従軍許可が出なかったからです。この映画に登場しているフェダイーン（現地ではこのように呼びます。コマンドつまり戦士のこと。アラビア語複数形）の多くは、この映画撮影の後ヨルダン軍に攻撃され殺されています。生き残った者たちも８５年までにほとんど戦死しています。映画に登場している現地の隊長アブ・アリ氏は無事脱出して現在はＰＦＬＰ（パレスチナ解放人民戦線）副隊長です。ＰＮＣ（パレスチナ民族議会）のメンバーでもありま

す。

若松氏が丸岡裁判の法廷で証言された中から。

「７１年にジェラシ山のパレスチナ・コマンドの基地を取材していた時、突然、今日中に山を降りろと降ろされました。ベイルートに戻り、次の日の新聞を読むと、現地で会った皆が公開処刑（ヨルダン軍に攻撃されて）になって吊された写真が出ていました。それ以来、命を助けてもらったという思いもあります。訓練をしていた人たちが皆、死んだ。…」

映画の中では、重信同志のアジがあります。早口なのは、収録時のテープレコーダの電池が弱っていたために再生音が早くなったのを足立同志が雰囲気を出すためにそのままにしたからです。実際の本人はあのような話し方をしないので。念のため（笑）。彼女の話している内容は、旧赤軍当時のものです。現在の日本赤軍の立場と路線は、旧赤軍派のそれとは全く異なります。「世界党－世界赤軍－世界革命戦線」とはもはや言いません。７４年には変わりました。たとえば、当時の「世界同時革命」。それに対して今の日本赤軍は、各国の革命の発展段階、状況は異なっているとして、革命の一国的実現を認めています。必要なことは、各国革命主体間の相互支援と同質化です。同質化と言っても、スターリン主義的世界党化ではなく、革命の相互支援、国際情勢認識の一致、反帝・国際主義の戦略一致というよな意味においてです。国内における人民本位の統一戦線に対し、国際では党的レベルによる統一戦線と言っても良いでしょう。

「帝国主義支配と闘い、自国人民に依拠して自国の敵を打倒し、社会主義建設を共同する反帝と自力更生の主体的立場に立って、党を革命しあう同質化の闘いを軸に国際共産主義運動の統一をかちとらねばならない」（「日本革命家の任務」１９８１年）傍点は丸岡

実は、私はこの映画を国内では見ていません。レバノンで見ました。大阪の関西大で足立正生講演付であったのですが、ヤバイと思って行きませんでした（非公然志向で）。足立同志は、７４年に国外に居た時に不当手配され、帰国できなくなりました。ゴダール監督（フランス）もパレスチナ・ドキュメントを撮ろうとしましたが果たせず、若松さんが果たしました。

日本赤軍の路線や闘いの軌跡を知りたい方は、話の特集刊行の本『日本赤軍２０年の軌跡』（定価４８００円）をどうぞ。出版社倒産のため、考える会あるいはウニタ書舗（０３－３２９１－５５３３）に。

２．㊦のハイジャック闘争に対する考え方

拙著『公安警察ナンボのもんじゃ』（新泉社１６４８円）をどうぞお求め下さい。意外に、全国の図書館にあるそうです。本の中では「ハイジャック論序説」（タイトルは編集者）ですが「本説」はありません。原題は「ハイジャック考」。

9・8丸岡同志控訴審勝利集会へのあいさつ

日本赤軍　浴田由紀子

９・８丸岡同志控訴審勝利集会に結集された闘う仲間達へ心からの連帯のあいさつを送ります。

私は１９７７年日本赤軍の獄中同志奪還闘争で、いったん日帝の獄から解放されましたが、不覚・不当にも、今年３月ルーマニアで再逮捕され、日本に強制送還されてしまいました。いったん勝ち取った勝利的状況を最大限活用しえなかった不十分を自己批判し、新たな戦線（任務）への結集をはたすべく、現在東拘で奮闘しています。

１９８７年、敵はコソクな手段による丸岡同志への違法別件逮捕を行い、その後の全国いっせいガサ、フィリピンにおける現地警察を動員しての泉水同志逮捕・・と法の枠を大幅に突破した「過激派」「テロリスト」「日本赤軍」狩りを展開しました。その上で「航空機の強取等の処罰に関する法律」なる違憲、治安弾圧法をもって、丸岡同志の関与・非関与にかかわらず、同志が日本の変革を志向する日本赤軍のメンバーである、故を持っての報復、思想弾圧、重刑攻撃を掛けて来ています。この敵の「テロリスト」「過激派」「日本赤軍」を口実とした報復、思想弾圧、重刑攻撃を断呼許すことは出来ません。

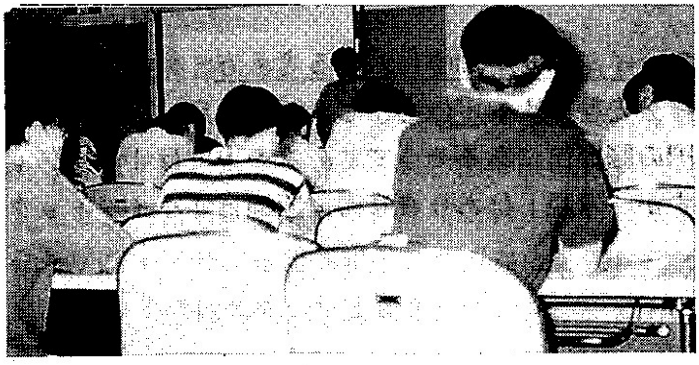
丸岡同志は「革命参加による死や獄入り（それがデッチ上げの容疑であっても、革命活動を行っているということで加えられるのだから）私にとって何の悔いでもありません。私は自らの信念をすてて、思想的に死ぬより、自らの信念に生きる価値を見い出します」と言っています。今我々が１人の「過激派」「テロリスト」にかけられる不法・不当な弾圧攻撃を許すなら、明日は「テロリスト」「過激派」の一言で、全ての人民への弾圧、違法な攻撃を許すことになるでしょう。すでにこの春、日帝国家権力は「オウム」の一言での違憲違法な捜査、逮捕を公然と行いました。

総右傾化といわれる９０年代中期の政治状況の中で、敵の反動化、なしくずし的な軍事強化（国家権力強化）、人民統制強化はますます進行しています。官僚にコントロールされた村山政権は８月末、ついにゴランへの自衛隊の派遣にＧＯサインを出しました。この日帝の軍事再侵略を敗戦５０年の今日、いったい誰が望んでいるのか？ひとにぎりの官僚と資本家でしかない事は明白です。圧倒的多数の人民の意志を無視して国の未来が左右されようとしています。

我々はあくまで敵の反動化、軍事化を許さず、そのきざしとしてある１つ１つの人民への弾圧、攻撃をうちくずしていくことから、人民の権利と共生の実体を生活の場から作り出す闘いを実現していきましょう。その結束する力で日本の未来を真に人民の手に取り戻す闘いをおしすすめてゆけると思います。丸岡同志控訴審が、これ以上の日帝のデタラメな思想弾圧、違憲違法な国家権力の行使を許さない大きな一歩になる事を信じます。

勝利を！共に！

浴田由紀子同志（画、Ａ）



ルーマニアで〝逮捕〟された日本赤軍・浴田由紀子〝強制送還〟の一部始終

●手記　浴田由紀子（東京拘置所在監）

●早朝約八人がドカドカと侵入

3月20日月曜日、午前7時、誰かがアパートのドアをノックした。いつも騒々しく呼びかける隣のバアちゃんや友人達ではない、それは遠慮がちな静かな音だった。が、私はのぞき穴を何の警戒もなくのぞいてしまった。見た事のない男が一人立っていた。ほぼ同時にドアの右手に人の動く気配がした。「ウン？」と思うと同時に誰かが何かを叫んで、同時に部屋のドアが激しくけとばされた。あわててドアをおさえようとした私はドアと壁の間にはさみ込まれてしまった。身動き出来ないまま、私の目の前には短銃を持った男が立ちふさがり、そのうしろの狭い通路を数人の男達がドタドタと通りぬけて部屋の中へ入ってきた。

私は、ドアと壁の間に私をはさんでいた男と別の男によって後ろ手錠をかけられた。こづかれる様にして奥の広間の長イスにすわらされた。その間にも男達は、銃を耳の横にかまえて寝室を、台所を、ベランダを、バタバタとかけ廻って部屋を捜索している様子だった。誰かが「シャンタネグロ（黒いカバン）」と叫んで、寝室にいた二人が棚の旅行カバンを床にひきずり降ろした。

私は長イスの上で、「あなた方は何者か」「何故こういう事をしているのだ」「これはどういう事なのだ」と英語で、そして片言のルーマニア語で男達に聞いたが、誰一人返事をしなかった。

寝室や台所をチェックしていた男達が小声で何か言いながら次々とエントランスや広間に集まって来た。奴らは女一人を含めて全部で八人位いた。黄色っぽいスーツを着て、顔に傷のある色黒でやせた中年男がエントランスから広間に入って来て、入口の机の上から私の名刺入れを取って誇らしげに私に見せた上で自分のポケットに入れた。「こいつがボスだ」と私はこの時理解した。後に奴は「イリエ・ネネ」と呼ばれていた。そして奴は、「パスポートはどこだ」と叫んだ（それは出かける準備のため大金を入れた腰まき、時計、手帳、くびかざり等と共に机の上に置いてあった）。一人の男が「机の上にある」と言って取って渡した。〝ネネ〟はパラパラとめくって、私にさし示しニヤリと笑って、これも奴のポケットに入れた。全ては無言だった。奴が「ガーター（おしまい）」と言うと私の横に立っていた女が玄関から短靴を持って来て私に「はけ」という動作をした。そして他の男は「鍵はどこにある？」「ドアについていた」などと言いあっている。玄関にかかっていたコートを私の肩にかけて、奴らは私の背中を押した。

私はエントランスに居るネネに向かって、「あなたは誰なのか」「これはどういう事なのか」と再び聞いたが、奴は「レイターディスカッス」と答えたのみで、「メルジェム（行こう）」と他の奴に指揮して私はアパートからつれ出された。

アパートを出る時、両隣のバアちゃん達がルーマニアで〝逮捕〟の浴田由紀子は永田洋子同様に東京拘置所の自殺房

●筆者のプロフィール
1950年山口県生まれ。73年東京の大学を卒業後、74年東アジア反日武装戦線に参加。三井物産、大成建設等の企業爆破事件で75年5月、爆発物取締罰則違反容疑で他の7人のメンバーとともに逮捕される。一緒に逮捕され、獄中自殺した斉藤和とは恋人関係だったといわれる。いったんは自白したものの、獄中で再度闘う意志を固め、統一公判で獄中闘争を担っていた。
77年、10月1日、日本赤軍の「同志奪還ハイジャック闘争」（ダッカ闘争）で泉水博、大道寺あや子らと共に東京拘置所から超法規的措置により出国し、アラブを拠点にパレスチナ解放闘争を闘っていた日本赤軍に合流。警視庁公安部は昨年6月、筆者らを偽造旅券を行使したとして国際手配していた。
筆者は95年3月20日、ルーマニア市内のアパートにいるところを現地の警察当局に拘束され、日本に送還された。「偽造有印私文書」行使で起訴されて、現在は東京拘置所において公判を闘う日々。超法規出国で公判停止中の企業爆破についても併合審理されるのではないかと見られている。

出て来ていた。いつも世話になっているバアちゃん達に何か一言言いたかったが、「迷惑をかける事になるかも知れない」などと思うだけで何一つ言えなかった。奴らは、バアちゃん達に何か激しい口調で言うとアパート内に押し込んでいた。奴らはエレベーターを使わず、私をはさみこむようにゾロゾロと階段を降りて行った。

車はビルの入口に尻を付けて止めてあった。白いダッシャの後ろの席に男と女にはさまれて押し込まれた。朝7時すぎだというのに出勤前のサラリーマン達の姿が何故か駐車場には見えなかった。他の男達は大通りの方へ皆で歩いて行った。車が出発してから、運転席の男がズキンの様な物を私の隣の男に渡すと、男は私のメガネを取ってズキンをかぶせた。わた入れのズキンは何のニオイもしなかった。ただ少し息苦しかっただけだ。

●最初はドミトリー風の部屋へ

車は市の中心部に入る。初めのサークルを右手に取ってコレンティオ湖を渡り、空港へ行く道を湖沿いに走って行った。車の中で奴らは「マルファ（商品）は一つだけだ。全て終了した」とか「マガジン（国内空港のある地名）」とかいいながら無線連絡していた。車が市街からはずれたな、と思ったらすぐに右手にまがって停車した。大男が私を肩にかかえ上げて、建物の中につれ込んだ。私はベッドの上にのせられ、片手をスチームのパイプに手錠でつながれてズキンを取られた。メガネがないので良くは見えないが、そこはドミトリー風の部屋で飾り気のないベッドが6個とロッカーダンスがあり、入口にはトイレがあった。「あなた達は何者だ」「ここはどこだ」「どういう理由なのか」「ボスに会わせろ」と、私は英語で聞いたのだが、誰一人答えず若いのを三、四人残して次々出て行った。ブラインドの下りた窓の外ではさかんにヘリコプターの音がしていた。

私は何故かむしょうにねむくてウトウトしてしまった様だ（昨夜寝てないわけじゃない、今朝は5時に起きてすでに一仕事した）。何もニオイのしないズキンには、ねむり薬がしみ込ませてあったのかも知れない。時々男女が同じ室の中でゲーム（サイコロやカード）に興じている声が聞こえたが私はウトウトとねむっていた。時々目を覚まして、「ボスと話させろ」「コーヒーが欲しい」等の要求をしたが、彼らは答えなかった。何度めかの要求の後「医者」と名のる者が来て、私の目と口をのぞき、血圧を計った。「ひどくねむいのでコーヒーが欲しい」というと「特に異常はないがコーヒーと同じ作用のあるこの錠剤をあげよう」と言ってポケットから白い錠剤を出してわたそうとした。私は「身分も名前もなのらない人々からわけのわからない薬をもらっても、のむわけにはいかない」と言ってことわった。その後奴らの一人が一本のタバコをくれた。

午後になって起こされるとネネが来ていて「指紋を取る」と言われた。「あなた方は誰なのか」「何故私はこういう状態にされているのか説明を受けたい」と問いかけると「我々は日本警察とコラボレイトしている者である。あなたはバッドウーマン・ジャパニーズだ」という答えが返ってきた。「ボスと話がしたい」「今その必要はない。我々はまず指紋と写真をとらなければならない」というやりとりの後、ベッドの上で手にスミをぬられ指紋を取られた。トイレで手を洗わせた後カベにおしつけて数枚の写真も撮った。再びネネは技術者といっしょに「後で話をする」と言って出て行った。夕方まで午前中と同じ状態で放置され私は再びねむってしまった。

やがて「オーケー」と言って数人が部屋に入って来た。私は再び後ろ手錠にフクメン（黒ジャージのいわゆる目出し帽風のズキン二枚）をされて車にかつぎ込まれた。市内ステファンシャルマーレの内務省警察一階の部屋につれ込まれた。夕方6時頃だったと思う。

●ルーマニア内務省警察へ

ネネと数人の私服が現れて、「我々はあなたがジャパニーズウーマンである事を確認したので逮捕する」「あなたが使っているパスポートはあなたの物ではない。あなたの指紋は日本警察によって××のものである事が確認された」と言って幾枚かの用紙の束を見せた。私が手に取って見れたわけではないし私にはメガネがなかったが、そこにはICPO・TOKYOのFAX用紙が5～6枚、××なる者にかかわる指紋・写真等のデータがつづられていた。

「ジャパニーズウーマン××である事を認めるのか否か、逮捕するのでこの書類にサインしろ」「責任者は誰なのか、あなた方のチーフと話がしたい」「これ以上の話はない。通訳が必要であれば用意する」ネネは、指紋がある以上もうウソは通用しない、××の指紋は世界に一つしかないのだとか、オマエのために5日間俺はねむれなかったとか片言の英語とルーマニア語でしゃべって引き上げた。残った奴らが何かの紙に署名させようとしたが拒否。ネネの手下が私のパスポート等を机の男に渡した。女二人が入って来て私の服を全部ぬがして点検し、それが終わると制服の男が下の留置場に私をつれて降りた。女の制服が「名前は？」と聞きながら、通路なかほどの房の一つに入れた。中には三人のルーマニア人女性がいて親切にベッド作り等を手伝ってくれた。私は再び与えられたベッドに横になってねむった。

1時間位して呼び出され、上へ連れて行かれた。先の紙に署名しろと奴らがいい、私はボスと面会させろと要求した。その間も机にうつぶせになってねむってしまう私に奴らは「ねむらないでくれ、頭を上げて答えてくれ」と言った。

そこへ小柄な日本人風の男が入って来た。入って来るなり「ここでミカンを食べてもいいか」とルーマニア語でことわってミカンを食べ始め、私にもくれようとした。奴らは、「ミスターセクレタリア」と呼んでいたが男は私の後にすわり名前も身分も名のらなかった。ただ「私は警察の者ではありませんので質問はしません」と言った。何も反応しないと私にスペイン語で話しかけて来た。この日本人をまじえて私服の質問はくり返された。何も答えないので日本人は「必要なら呼んで下さい。いつでも来ます」と言って引き上げて行った。その日はそのまま下に降ろされ翌日までねむり続けた。翌朝同房の人達は「死んでいるみたいだった。どうしたんだ、病気か」と心配していた。

21日、誰かに起こされた。制服の看守が数人房内にいて点呼の様な事をしていた。「弁護人をたのみたい」と私は要求した。仲間達がコーヒーを入れてくれ、「起きていなさい。何か食べるか？」といろいろ話しかけてくれるが意識はモウロウとしていて座るとねむってしまう。

夕方再びつれ出された。英語と日本語が出来るという若い女が来ていた。他にも二、三人が次々に室内に入って来た。弁護士とスペ

イン語の通訳である事が後でわかった。昨日と同じ男が同じ質問をして紙に署名しろと要求した。私が答えないと自分で書け、と紙とペンを渡された。私は「あなた方のボスと話がしたい」とだけ言った。男の紙にはたぶん「私は日本人××だが云々」と「上申書」の様な事が書いてあったのかも知れない。

弁護人という男が私の正面に来て、「私は弁護士だ、ルーマニア内の事についてだけあなたを援助する事が出来る。但しルーマニア政府に不利になる事は協力できない」とルーマニア語で言った。また、連絡すべき友人がいるのか、警官にたのんでアパートから何か持って来てもらう必要があるのかどうかも聞かれた。「ない」、「会社を持っているのでその取り扱いについて従業員に一任する手続きをしたい」と私が言うと、「それについては明日打ち合わせをしよう」。

スペイン語通訳は、「あなたには三つの選択肢がある。ルーマニアで裁判する、ペルーに送られるか、日本に送られて裁判を受ける。自分はペルーを知っているが止めた方がいい。たいへんだ」「その為には君は先の紙に署名しなければならない」。私は「今署名はできない。ボスと話がしたい。ルーマニアに逮捕されているから裁判はルーマニアで受ける」と答える。彼らは、私の返事がおわる前に誰かに呼ばれて、ドヤドヤと出て行った。その数分後には「あなたを明日、日本警察に引き渡す事になった。二度とルーマニアには帰って来れないだろう」と告げられた。「裁判をルーマニアで受けると言った。ボスとの会話は保障されていない」といってみたが、全てがアリバイ作りの芝居だった事をようやく理解した（誰かが飛行機の切符がアレンジ出来たのだという話をしていた）。

下で仲間達にサヨウナラする。再び二重の目出し帽風ズキンと後ろ手錠で大男にかつがれて車に押し込まれた。

●〝ゲスト〟から空港へ

車は空港道路を国際空港よりさらに十数キロメートル前後行って右手にある二階建て一軒屋の中庭に着いた。ベルを押しても誰も出て来なかった。大男は私をボンネットの上に降ろしてしばらく待った。後の車の人間が鍵を開けた様子で家は無人だったと思う。二階の部屋の入口で大男は私を肩から降ろしズキンを取った。ネネが登場して「今から君は私達のゲストだ。今夜はここでゆっくり休んでほしい。明日君を送り出すまで私達が世話をする」とインギンに言って引き上げた。4メートル四方位の寝室にセミダブルベッド、タンス、鏡台、小机、ひじかけイス二つにトイレが付いている。普通の民家か別荘の一室、家具はルーマニアでは高級品で木ぼりの全てに〝I〟のイニシアルが入っていた。

3月22日、6時半頃、目覚めた。若い男女がイスにもたれてねむっていた。意識はかなりはっきりして来た。銃が男女の横の小机の上にあったがベッドに片手錠で手が届かない。窓の外で鳥が鳴いている。静かな所だ。

しばらくして女が目を覚ましたので少しこんな話をしてくれた。「26歳、この仕事を始めて3年になる。家人は仕事の中味を知らない。母がいつも心配している。祖父も同じ仕事をしていた。5月には結婚するが、結婚してもしばらくは続けたい」

「グッドモーニング」と言って青ブレザーの中年男が入って来た。見張りチームのボスらしい。二組の男女と奴が交替で見張りをした。彼らは、時間を気にし、「昨夜も寝ていない」と言って交替で別室にねむりに行った。それ以外の時間は私の横でサイコロやカード・パズルに興じていた。コーヒーを要求するとインスタントコーヒーを一杯くれた。昼すぎ、サラミと白チーズ、野菜の盛り合わせを「昼食だ」といって持って来た。私が食べないでいると若い男女が奪い合う様にして食べた。午後コーヒーを要求すると青ブレザーはミルクを持って来させた。コーヒーしか飲まないと言ってコーヒーだけ飲んだ。要求すれば奴らはタバコもくれた。

日が傾く頃、奴らは誰かの連絡を待ってバタバタし始めた。トイレに行かせ「メルジェム」と言って再び後ろ手錠・コートをかけ、さらに顔に三枚のズキンをかぶせて車内へかかえ込んだ。左右には若い男女が座っていたが、空港に着いた所で女は青ブレザーと交替。しばらく車内待機。奴らはイライラと誰かとの連絡をくり返し、段取りが悪いと言い合っていた。青ブレザーは私の横に座った時点から激しく全身が震えていた。

ルーマニアにおいて私は、20日夕方から21日夕方までの約24時間のみオフィシャルに当局に拘束されていた。21日夕方から飛行機に乗せられるまでの24時間余をネネと呼ばれた男は「君は今から私達のゲストです」と言って片手錠でベッドにつないでおいた。未だに私は自分が誰の、どういうゲストであったのか知らない。20日の最初の10時間も、だ。

奴らはジャンボ機のタラップの下で私のズキンをはずした。数人の私服の男達がいたがメガネのない私には見えなかった。大男は私をかついでタラップを上り機内では追い立てる様に一番後ろの席まで歩かされた。ガランとした機内の一番後ろあたりに八人位の日本人が一つの空席を取り囲む様に座っていた。大男は私の手錠をはずし空いた席に座らせてメガネを返してよこした。奴らが左手の日本人に何か言ってよこした。そして奴らがひき上げると、右手後ろの男が私に話しかけて来た。

「あなたの荷物はおあずかりしております。（パスポート・鍵等を見せた）これから日本まで私共があなたのお供をいたします」

私は何一つ質問せず無言で聞いていた。奴らもまた無言だった。右手には中年の女がいた。幾枚ものハガキを書いていた。左手の暗い顔の男は時々迷惑そうにヒジカケから手を動かす以外緊張して座っていた。奴らに囲まれて座っている以外、私は機内では普通の乗客の様だった。20日朝以来初めての食事を取り、映画を見てねむった。

●アブダビからバンコク経由

飛行機がアブダビに着く少し前再び右後ろの男が話しかけて来た。トランジットカードを書かなければならない。「御自分でお書き下さい」「ここにあなたが日本に着くまでの通行証が用意してございます」それは名刺大黄色の三つ折りカードで写真はなく××の名前・生年月日等が記されていた「帰国のための～」で、「こちらでもいいんです」とベルーのパスポートも見せた。

アブダビ空港で「私達」は最後に降りた。迎えの日本人とアラブ人に導かれてビップ・ルームへ通された。立派なソファが並んでいた。数人の日本人が出入りして同行の何人かとコソコソ話していた。私の近くには誰も座らなかった。皆が二、三人ずつバラバラに座っていた。誰かがセルビスの男性を追い出した。私は通路に出て向いのトイレに入った。洗面所には先の女性が待っていた。三日ぶりに石けんで顔と手を洗った。頭はクシャクシャだが少しサッパリした。

短時間の滞在の後、「我々」はタロムに乗り込んで私は再びひとねむりした。タイのバンコクに近づくと右後ろの男は「入国カードをトランジットの項で書く様に」と話しかけて来た。話は同じだ「帰国のための～』でもペルー人でも良い」。

バンコクのトランジットも同じだった。機の出口で待っていた数人の日本人・タイ人を加えて「私達」は他の乗客の後ろからゾロゾロと群をなしてビップ・ルームに入った。室の右手奥に数人の先客が居た。そのグループは夕方の搭乗開始まで私の前に顔を見せる事はなかった。日本から出張して来た数カ国語をしゃべる女一人を含む警視庁公安・外事課のデカ三人だった。私はこの室に約10時間いたのではないかと思う。テレビは初めCNNで地下鉄サリン事件等を流していた。途中誰かが切り換えるまで誰もチャンネルを変えなかった。奴らは二、三人ずつボソボソと話していた。後で奴らが帰りの便や今夜の宿を大使館や旅行エージェントと手配している事がわかった。私の周りには右手後ろの男と右手の女が座った。男は「任務」が終わったらしくうちとけた様子でルーマニアの事等を話しかけて来た。初めて奴が在ルーマニア日本大使館の経済アタッシュである事がわかった。女は、私がトイレに立つと「お使い下さい」と言って歯ブラシとタオルをよこした。

私はここでの数時間、奴らの会話を聞き、地下鉄サリン事件のニュースを見、奴らと同じ仕出し屋の弁当を食って夜の便を待っていた。誰も私に「ここから出てはいけない」とは言わなかった。しかし私がトイレに立つたびに、背のびをするたびに、大きな室にいる二十余人の目が私の動きを追っていた。私は何故自分が、あの部屋から一歩も出ようとしなかったのか不思議でしょうがない。後日、勾留理由開示公判での弁護人の質問に対して、検事はこの間の私の身分を「任意同行です」と答えている。奴らは、ルーマニア時間22日夜9時頃から日本時間24日朝6時頃まで「任意同行」という法的根拠で私を日本領空までつれ込んだ。何の暴力的処遇も受けなかった。手錠もなかったし銃も私の目には入らなかった。それは20日の朝7時、私のアパートに押し入りいきなり後ろ手錠をかけた奴らのやり方から一貫している。身分の言えない人間達による無言の圧力が私に次の一歩を常に強制していた。そしてその、圧力のままに私は自分の足で歩いていた。

午後8時20分頃、「それじゃあ」と言って奴らは私を促した。私は無言のまま奴らに従った。初めて右手奥のデカが登場した。私が何も荷物を持っていないので「本当に何もないのですか、カバンとかも?」と聞いてきた。私は着のみ着のまま時計すら持ってなかった。搭乗口のボディチェックで、デカは何かにひどくあせってバタバタしていた。それまで同行していた女性が「お体に気を付けて、お元気で」と言って頭を下げた。私は三人のデカにはさまれて機内へ、後ろの方右寄りの席で奴らの間に座らされた。大勢の子供づれのタイ人が乗り込んで来た。二人も三人も幼児をかかえて日本に出かせぎにいく人々だ。スチュワーデスに英字新聞を要請すると、デカが何か言ってタイの英字紙を与えられた。機内のテレビでは地下鉄サリンと一斉捜索をやっていた。私は普通の乗客の様だった。

●日本領空に入り逮捕状執行

食後ねむっていた私は「ちょっとすみません、日本領空に入りましたので後ろの方まで来て下さい」と呼び起こされた。後ろの通路（スチュワーデスの作業場?）で偽造有印私文書行使なる理由で逮捕状と収監状なる物を示された。22日付けだった。手錠をかけられ写真を撮られた。女デカとスチュワーデスが身体検査をした。押収物品なるものの再確認、服のポケット等からタバコ・チリ紙等を取り上げられた。以後食事の時以外奴らは私の手錠をはずさなかった。

成田に着くと奴らはパスコン手前の一室に私を連れ込んだ。空港職員の一人が入国カードに記載しろと言い「決まりだから書いてもらわないと困るんですよ」と言い、例の黄色いカードのデータでも、ペルーのパスポートの名前でもいいからという。結局何も書かないまま「困りますが、仕方がないですね」で、入国出来る事になった。少なくとも私の目の前ではいかなる手続きも正式にはなされなかった。ちなみに、後日私はルーマニアで使っていたパスポートに3月22日付けのルーマニア出国印が押されている事を知った。

ルーマニアにおいて捜査権を持たない日本警察は、アパートの荷物に何の関心もしめさないルーマニア当局の協力をあきらめて、何も知らない、そして秘密警察の突然の登場におびえていたであろうアパートの大家をそそのかして、アパートの荷物の日本大使館への引き渡しを行わせ、大使館内での物色を行った。デカは「外務省からアパートの荷物の処理について問い合わせが来るから答えてやってくれ」と後日言って来た。登場した村木某なる外務省の人間は「大使館も狭いので早く処理をと言っております」と白紙を何枚も持って来た。リストの有無をたずねると「その様な物はありません」

全部を持ち出したとは思えない。リストもなしにどう処理方法を依頼出来るというのだろうか。奴らはリストを作っていないのではない、リストを作れないし、出せないのだ。誰にも妨害されない治外法権の日本大使館の中で奴らが何をこっそりと抜き取り、何を盗み見たのか、それを誰にも知られたくないだけなのだ。押収品リストも家宅捜索令状もなしに、奴らは警察権の及ばないルーマニアでの不当捜査をこの様に貫徹した。

4月14日私は、偽造有印私文書行使なる理由で起訴された。

〈了〉

『ザ・パスポート』50号の訂正　お詫びします。

P2	7行目	抗日線→抗日戦	P8	下から10行目	期限語→期限後
P7	下から8行目	残念ながら→残念なのは	P9	2行目	裁判書→裁判所
P8	8行目	呼称番号→称呼番号	P15	10行目	明らかに克服 →明らかにし克服
P8	下から3行目	書事情→諸事情			

「懲罰」報告

95·8·22　浴田由紀子

（彼女は「食べ物を捨てた」ということで「取調べ」を受け「懲罰」になりました。）

８月17日午後から８月22日朝8:30頃まで「懲罰、軽塀禁、図画閲読禁止、５日間」なるもので、通常と違う以下の条件を強要されました。ちなみにその「罪状」というのは「環境保全妨害」ということなのだそうです。

中身は以下です。

●終日房内において房中央に正面（廊下側）を向いて座ること。特に正座である必要はないが、机は使用しないこと。

●運動は許可しない。午前午後各15分ラジオで放送される「房内体操」も許可しない。ただし初めの６日間がすぎた時点から各６日ごと（７日ごと？）に１回戸外運動を許可。

●入浴：第１回目の入浴は許可しない。バケツ１杯の湯を与えて房内で体をふくこと。第２回目以降は通常に入浴を行える。

●洗濯：「願い出」によって、午後1:00～2:00の間に洗濯をする事を許可する。通常の提出時間には提出できない。

●房内におけるラジオ聴取：許可しない。ただし必要な「告知放送」があれば聞かせる。看守が「起床」とか言いにくる。

●午睡：許可しない。

●掃除：起床から朝点呼の間のみ許可する。

●座布団：官支給、自弁品にかかわらず、許可しない。

●うちわ：昼間の使用を許可しない。夕点検～朝点検の間のみ許可する。

●理髪：実施させない。懲罰が１ヵ月を越える場合、検討する。

●診察：受け付けるが居房内で行う。

●自弁食料：制限しないが食べることが許されるのは各食事中及び房内体操の時間帯のみ。看守が「喫食許可」と言いに来る。

●裸になること：許可しない。

●図書の房内所持：許可しない。含、弁護人からの手紙、購入の新聞もダメ。ただし「明確に」（？）訴訟資料については房内に置いておくことができる。が閲読は夜間（午後5:00～午後9:00の間）のみ。（今回、統一公判の控訴趣意書、再審請求書、供述調書等を所持していましたが、意見書記録、裁判報告書等は許可されなかった）

●文具・筆記具の所持・使用：許可しない。

※今回、私は情願認書中であったため、夜間午後5:00～9:00のみボールペンが房内に入りましたが、下書きのためのメモ用紙の使用は許可しないというアリバイ的なものです。

●発信：許可しない。含、弁護人あて。ただし緊急と認められる理由がある時は検討する。

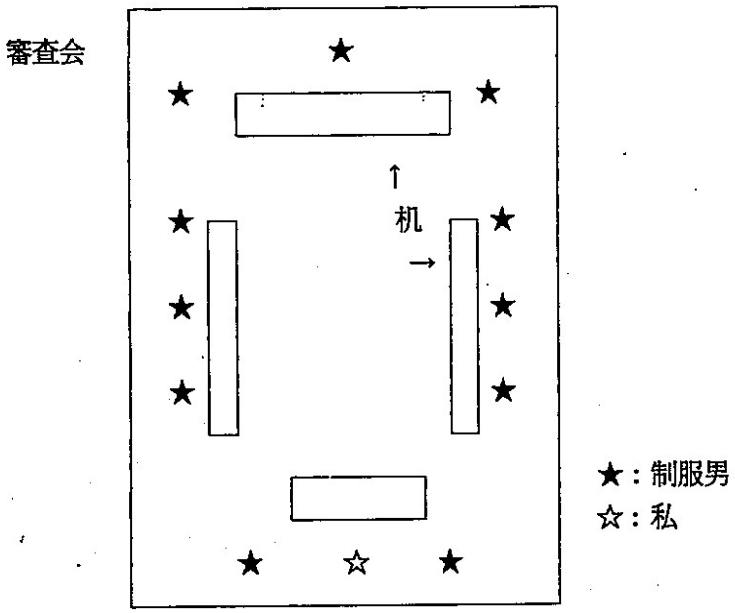
●受信：許可しない。（同上）

※「告知はする」と言われたのですが実際には、今回、家族からの手紙を告知されなかった。
●接見：許可しない。弁護士については認める。家族・友人の場合、緊急性が認められる場合検討する。

だいたい、告げられる「条件」としては以上のようなものです。
執行になる前約1週間位の間に「取調べ」と称する看守による「作文」調書のようなもの作成。9～10人位の東拘の制服を着た男達による「審査会」なる儀式に引き出され、弁論の機会とかはもちろん与えられないまま、翌日、「執行」を言い渡されます。「量刑」の根拠とかはもちろん示されませんし、奴らは役職、名前を聞いたのですが、「答えられない」「その必要はない」ということで名乗っていません。

すでにお気づきだと思いますが、それでなくても劣悪な条件下にある獄中者へのこのような処遇は、その精神的・肉体的苦痛の強化において、量刑の不明確さにおいて、第三者による弁護の機会のなさにおいて、etc, etc. 基本的人権を明確に侵害するものとしてあります。さらに実質的には、訴訟準備の妨害だけでなく、情願も実質妨害されている。

単に獄中処遇改善闘争の仲間達のみでなく、広く人権問題を闘っている部分へも報告していきたいと思います。今後統一獄組の仲間達と獄中人権訴訟、懲罰訴訟等をやる時には、是非共同訴訟人として、共に闘っていきたいと思っているので・・・。今回はとりあえず上記報告をしておきます。



最近の東拘の懲罰実態（『監獄通信』掲載予定）

前略

その後も先生には、お変りなくご健勝でご活躍のことと存じます。小生もお陰様で元気です。

扱て昨日（四日）東拘より岐阜刑務所に移送されましたので、ご連絡いたします。尽くましろは二ヶ月と遅れたことで、先生乾に宅下げしました書籍類の御拘、何かとおじゃまになりていたことと存じます。申し訳ありませんでした。そしてまた、お手数をかけ済みませんが、どうぞ此度岐阜刑務所への送付、差入れをお願い致します。ご面倒をかけ、甚当に申し訳ありません。どうぞよろしくお願い致します。なお、送料は是分の五日、切手を同封いたします。先生のご健康、ご活躍、祈念して止みません。以上、お願いまで、この他のことは何も書けません。

乃尺

一九九五年七月五日

奇木先生人

[illegible]

9．2集会への連帯のあいさつ

９５．８．２９　丸岡　修
（東京拘置所不当在監中）

日本帝国主義が連合国に降伏を正式に認めて調印したのが９月２日。しかし、この９月２日が、アメリカ帝国主義への敗北承認になりはしたものの、日帝が本当に敗北した相手、すなわち抗日戦を闘ったアジア人民に対する敗北を認めないままに今日まで来てしまいました。それが、戦後補償どころか、侵略の事実さえ認めようとしない日本のあり方をもたらしたとも言えます。ムッソリーニを自力で打倒したイタリア人民や、第１次大戦後に自力で帝政を打倒した歴史のあるドイツ人民のように、日本人民は日帝を自力で打倒することができず、反共反ソ連邦の国際戦略に移行していたアメ帝の手で一定の民主化はなされたものの、天皇制や官僚支配システムが温存されてしまいました。そればかりか、反ソ包囲網の最前線として、アメリカ帝国主義への従属下に置かれてしまいました。それが、１９５１年のサンフランシスコ・単独講和条約につながり、日米軍事同盟としての日米安保体制へとつながってしまいました。従って、日本人民にとっては、８．１５が日帝を自力で倒せなかった恥の日とすれば、９．２は日本がアメ帝の反共国際戦略に組み込まれた屈辱の日とも言えます。

村山首相は、「首相談話」なるものを発表しました。７月に衆院議員半数にも満たない数で強行採決した「戦後５０年決議」の失敗を取り繕うとしたものであり、言葉だけ「侵略行為があった」ことを認め「謝罪」を盛り込みましたが、自ら言明したように、天皇ヒロヒトの戦争責任を否定し、戦後補償も拒否するものでした。これが日本の現実です。

日本は侵略の歴史にフタをしたまま、加害民族としての罪を認めてそれを償う努力を放棄したままに、再び被害民族を日本の従属下に組み込もうとしています。戦争（侵略戦争）責任を認めないままに、国連安保理の常任理事国入りを果たし「経済大国」から「政治・軍事大国」として世界に君臨しようとしています。それに向けた実績づくりとして自衛隊海外派兵の計画を外務官僚がかつての関東軍のように独断専行で日本の派兵国家化をすすめています。官僚主導ですすめられている自衛隊のゴラン高原への派兵を社会党は止めることができず、翼賛体制化した日本の政治は、もはや「戦後」ではなく「戦前」と言えるのではないでしょうか。官僚の独断専行は官僚の意志だけでなされているのではなく、多国籍資本化しグローバリズム標榜の独占資本の意思を反映した財官政の三位一体と言えるでしょう。

このような日本を変革していくべき日本人民のこの５０年は、残念ながら負け続けの歴史です。しかし、勝つまでは負け続けるのだから、その負け方が大事です。この５０年の人民の闘いの歴史を教訓に、勝利にむけた闘いを準備していきましょう。人民の自治と共生を実現し、民主主義が徹底された社会を実現しましょう。他国にも支配されず、他国をも支配しない平和・民主・自主の新しい日本を創建しましょう。

９．２集会に集結された皆さんと共に頑張ります。

★9.18パレスチナ人民連帯集会へのあいさつ

1995. 9. 7（日本赤軍）丸岡　修

集会への連帯のあいさつを送ります。

サブラ及びシャティーラ・キャンプでのパレスチナ人民大虐殺から13年が過ぎました。当地に居た者としては、毎年この時期が来ると、帝国主義とシオニズムに対する表現のしようがない憎悪心がムラムラと湧いてきます。この当時、国連・安保理は、米帝によることごとくの「拒否権」行使に会い、イスラエルの侵略戦争をただ傍観するだけでした。ベイルートからのパレスチナ武装勢力撤退の安全と残るパレスチナ人住民の安全を保障するとして、ベイルートにやって来た米帝を中心とする多国籍軍は、何の役にも立たないばかりか逆に、イスラエル軍による掃討作戦を黙認するだけでした。結局、パレスチナ人住民とレバノン人住民は、シオニスト軍とシオニストの手先＝レバノン・ファシストの前に無防備の状態でさらけ出されました。イスラエル軍がキャンプを包囲する中でレバノン・ファシストによる計画的大量殺人がなされました。

この当時には、米帝によって骨抜きにされていた国連ですが、今は逆に、帝国主義陣営の世界支配の道具と化し、レバノンにあった米帝軍と同じ役割を演じています。すなわち、反帝勢力が侵略者に叩かれている間は傍観し（反帝でなくても地域支配に邪魔な勢力に対しても）、もしくは自らの手で攻撃し、帝国主義の同盟国や手先の白色テロリスト集団が劣勢だとそれにテコ入れするということです。このような状況下の国連ＰＫＯは、「中立」であることは不可能です。旧ユーゴスラヴィア紛争では、米欧帝はセルビア叩きに専念してきました。この5月には、親米国クロアチアが停戦協定を破ってクライナ地方に侵略しても黙認し、それどころか、米帝が情報機関を駆使しクロアチア軍を間接指揮していました。他方、セルビア人側の停戦違反に対しては（しかも現地国連軍からは謀略説があるにもかかわらず）ＮＡＴＯ軍が無差別の空爆で対応するという手を使っています。

日帝は、帝国主義陣営での己れの位置を高めるためにはこのような帝国主義的軍事行動に参加せねばならず、それに向けて自衛隊の海外派兵実績を積み上げようとしています。軍事行使部隊のＰＫＦとしての駐留しかありえないシリア・ゴラン高原に、日帝政府は自衛隊の派兵を決定しました。保守にかつがれた没落社民は、歴史の教訓そのままに帝国主義のお先棒かつぎになっています。日本の派兵大国化は断固して阻止しなければなりません。今こそ原則的闘いを。

帝国主義の全世界的な反攻の前に、闘う人民勢力は後退を余儀なくされていますが、そういう状況だからこそ、帝国主義本国間の革命勢力が奮戦しなければなりません。サブラ、シャティーラで流された人民の血に思いをいたし、帝国主義打倒の反帝・国際主義の闘いを発展させましょう！

革労協及び当実行委員会の皆さんの持続した闘いに敬意を表すと共に、私は、一身をすべて賭け全世界の被抑圧人民と連帯して最後に勝つまで連帯して闘うことを誓います。

ゆきゆき ミーティング

浴田由紀子さんの救援会を作る会
（ゆきゅをつくる会）
東京都荒川区西日暮里2-38-7 GSハイム404 支援連絡先
TEL 03-3891-7047

浴田由紀子さんって誰？

今年３月２４日、世間では地下鉄サリン事件で大騒ぎの最中、１人の女性がルーマニアから日本に強制送還された。

彼女が浴田由紀子さん（ゆきちゃん）である。

彼女は、１９７４年、東アジア反日武装戦線に"大地の牙"部隊として参加し、三井物産、大成建設、間組等の企業を爆破、その後、７５年に逮捕されたが、７７年、日本赤軍らの日航機ハイジャックで日本政府の「超法規的措置」によって東京拘置所より出国、そして今年、約１８年振りに日本に帰ってきてしまった。

「爆弾」、「ハイジャック」、その言葉の印象だけで全てを判断し、思考を停止してしまってよいのだろうか。

「東アジア反日武装戦線」とは、「大地の牙」とは、「日本赤軍」、「超法規」とは何なのか。

彼女たちは何故、何のために企業を爆破したのか、そしてその標的が何故、三井物産や大成建設や間組なのか。新聞やテレビが伝えない彼女の本当の姿は…

ゆきちゃんたちが日本人１人１人に突きつけた問いを知ってほしい。そして一緒に考えよう。

１０月１４日（土）

－２１年前、"大地の牙"が三井物産を爆破した日－

１７時３０分～

☆☆☆予定プログラム☆☆☆

- スライド上映 "大地の牙"
- 荒井まり子さんの話　その他
  （ゆきちゃんについて）

北沢タウンホール 第1集会室

世田谷区北沢2-8-8　(03)5478-8006

（下北沢駅南口　3分）